

特100

120



編十第書兼作能

祝

の

聲

露
ゴ
ー
リ
キ
ー
作



大正

3. 10. 30

内交



始



はしがき

マキシム、ゴリキが露國文壇へ首を突込んだのは一八九二年頃からで、其れ迄のゴリキは住所不定の浮浪者であつた。

或る時はパン屋の小僧に成つたことも有るし、或る時は町の人足をしたことも有る。又辯護士の支關番をしたり、ゲオルガの海船會社へ這入つて下級船員を勤めたこともあつた。斯う云ふ風であるからゴリキの前半生は實に慘憺たるもので、自殺を企てたことさへ有つたのである。それが一朝文壇の人となるや其の天稟を遺憾なく發揮して、僅かのうちにトルストイと肩を並べる迄に人氣を博した。ゴリキは學問さ云つては辛ふじて小學校を卒業したゞけで有るから、其の作は學理を基礎としたものでは無い、殆ど残らず自己が嘗め來つた實社會を根本としたもので、而か其もの描寫たる十中の中迄下層社會のそれである。

随つて作の上に表はれてくる人物は何れも憫れな、貧しい、たより無い人物許



りであるけれど、夫等の人物には強い「力」が有る。泣いたり悲しんだり、慨いたりする様な弱い人間はない。これがゴリキリーの理想であつて、又同時に彼自身が「強い人格の人」であつたことを表現してゐる。

「呪の聲」はゴリキリーがパン屋小僧であつた時代に起つて、はて涯もない曠野を彷徨してゐた彼が食旅行時代の自叙傳とも見るべきもので、例によつて「力」のある負けることの嫌ひな人達が描き出されてゐる。下層社會にでも戀はある随つて「呪の聲」にも戀も有れば嫉妬もあり、怒もあれば怒もある。が篇中に表はれてゐる人についてそれが主人公であるか否か云はれたら、丁度浪六の八軒長屋の如く、現はる人物が残らず主人公だと答へるより他はない。これほど漠然たるものであるが、其處にゴリキリーの見た人生と哲理とが最も濃厚に現はれてゐる。本篇は一八九〇年頃の作であるから、かの「三人」や「二十六人」一人」や「マルヴ」を作つたゴリキリーの全盛時代のものである。

譯 編 者 識

(2)

呪 の 聲

露ゴリキリー作

新香小史譯編

【その一】

朝日の光は霧に輝いたが、土牢の様な地下室の麵麴製造工場には依然として夜の濕つた陰氣な空氣が隅から隅まで漂ふてゐる、まだ職工が出揃ふ迄には一時も早く、僅かに釜焚きのスベリーと水扱のクロツクワと、それから新參のロカが雜役を勤める爲めに出てゐるのみである。

スベリーは頻りこ、黄色が、つた津かすの多い坭炭をスコップで掬つては入れ、掬つては入れして居たが、規定だけのメートルが上ると、スコップを投げ捨て、

(1)

クロツクラの傍に近寄り、

「何うだい兄弟、一服やらねえか」と其の肩心叩く、クロツクラは、老人が腰を伸ばす様にフン反り返つて、

「左うだな、宜からう」と土間へ尻を据へ、

「何しろ詰られえ事だ、朝から晩まで馬車馬のやうにこき使はれて、加之に豚の食ふやうな食事をあてがはれてさ、監獄の勤めだつて斯うまで酷いことア有りやしない」

「また兄弟の愚痴が始まつた」と、スベリーは笑ひ乍ら、

「だつて仕方無えや、俺等は働く爲めに生れて来たのだから、で働くのが厭なら死んでしまふか、それとも乞食に成つたが可い」

「全く此頃じや乞食が羨しい位だ」

「何うしたのだい手前は、今日は又老碌か病人の如に、馬鹿に愚痴るじやない

か、止しれえ、俺等の仲間じや弱いこと云つても誰も同情では呉れやしない、世間でも左うだが、殊に俺等の仲間じや強い者が勝だ。た兄弟、そんなに愚痴らなくつても纏てマノンと云ふ可愛い娘が来て、美しい顔を見せて呉れらア、しつかりしれえよ」

「違ひない」ミクロツクラは急にニヤ／＼して、

「マノンは全く美人だね、いや美人と云ふよりも可愛い奴だ、たしか十七ださ云つたつげな」

「さうさ、花ならば蕾と云ふ年紀だ、パン屋の職人にや惜しいもんだ」

「惜しいー」ミクロツクラは大きく目首き、

「だがマノンが有ればこそだよ。若しこの牢のやうな地下室に、マノンが來なくなつたら其れこそ地獄だ。まア彼女は此の闇い工場を照らす光だな」

「一体誰の者になるだらう」

「そりや手前何を云ふのだ」

「あのマノンがさ。此の工場に働いて居る者の中で、誰の持物になるだらうかと云ふのさ」

「彼や誰の持物にも成るめえ、何故ならば若しマノンが一人の持物になつて終つたら、大勢の者は失望するし、又持つた奴は、皆から嫉まれるじや無えか、神さまは其そんな悪戯はなさるめえだらうよ」

「手前の云ふ通だ、誰だつて此の工場に働いてる者は、マノンを一人の持物にはしたう無えんだからな」

「夫そんな麼こゝが有つて溜るもんかい」二人は女工の噂に時を忘れてゐる。

その時、トン／＼と階段を降りる音がして、聽て入つて來たのは一人の女工である。

色白で縮毛の瘦しやりとした英國型イギリスタイプで。まだ年齢は若さうであるが、顔のど

こかに所帯地味な俤おもかげもある。

スベリーは之を眺めるさ立ち上つて、

「ソーラ來た、噂うはさをするさ直ぐ影を來らア、正直なもんさ」獨言を云つて、女工の方に向ひ、

「マノンお早う。お出で此方へ！」と云ふ後からクロックワも、

「一寸お出で、吾等の光のマノン！」と大聲で云つた。

マノンは、僅かに振り返つて輕るく頭を下げたのみで、愛想もなく仕事臺の方に行く。

そこには新參のロカが、せつせと仕事の準備をしてゐた。

マノンは、何かいそ／＼としてロカに近寄り、

「お早うロカさん、いつも早いのね」と馴々しく云ふ。ロカは首を上げて、

「いや、左う早くも無えよ、其の證據にや、私がまだ仕事の準備を殘らす遣

ては居るが、それでも南向きの丘や、日當りの良い土堤は、薄い緑をもつて彩られ、町へ荷を運ぶ牛車や、馬車の通る數も日々に多く成つて來た。

斯うして、冬籠の陰鬱な季節は去ることも無く辭し去つて、モスクバの町にも空にも、「春」^{スプリック}といふ賑やかな、而かも和かい色が漂ひ初めたが、町端にある貧民合宿所は、依然として「春」も「平和」も「榮光」も見舞ぬ、哀れな別世界であつた。

平等な朝日は、たゞ一個の圓窓からこの合宿所の臺所へも射し込んだが、其の日影は郊外や、町中で見るやうな和かな、鮮かな光ではなくして、何となく冷たく、そして煙のやうに濁つてゐる。

それでも此宿の人達は、さながら蠅の如に、この薄く濁つた日光によつて、朝寒を凌がんとものごと、日南へ集つた、無論朝の祈禱などをする連中ではなく、思ひ／＼に、埒も莫い談に耽つた。そのうちでも麵麩賣のカシニヤが嘯八分の身

の上臈が、一番人氣がある。

「ウム、仲々波瀾の多い半生だが、お前は話すことも非常に上手だ」と、自ら貴族の成れの果たと名乗るオブレスは椅子を進めて、

「それから何うした？」

「それから？、最う之でお終ひよ」

「何だ、それつ切りか、じや男に欺されたこと云ふだけの事じやないか」

「だから妾は、最う一生人の嬬なんかには成りやしないと覺悟を定めたのだよ
たさへ百正の乳牛を持つてる人にだつて……」

カシニヤは、寔に詰らんといふ顔をして横を向いた。

すると、夜店屋のブラナアが横合から、

「嘔吐けー」と吐鳴つた。カシニヤは目を白くして、

「何だつて？、何が嘔だ？」

「へ、へ、へ、知らんと思つてゐるのかい、お前そんなに口では云ふが、肚裏ではメドウと夫婦いつしよになる積りだらう」

「何をこの山羊奴やぎめが云ふのだれ、最う一度云つて御覽、唯は置かないよ」

「まあア、其腰そんなに怒るなよ、メドウと夫婦になりやお前の名譽じやないか、ねカシニヤ、だからお前は、左うなるのを待つてゐるのだらう」

「まだ云ふのだれ」と、カシニヤは立ち上つて、

「いくらでも云ひなよ……だけどメドウと夫婦になつたら何うださ云ふのさ、え、赤山羊奴あかやぎめ、成らうと成るまひと妾達の勝手さ。メドウは此所の鑪屋のやうに嬖を半殺にするやうな人じやないよ」

「ハ、ハ、ハ、今から最う亭主の惚氣のろけを云つてらア」と、アラナアは笑つて、側に居る鑪屋の肩を小突き、

「手前、彼等に云はれても黙つてゐるのかい、嬖を半殺にするなんて云はれても

……」

すると、最前から唇を噛みしめて居た鑪屋は、

「黙りやがれ、カシニヤの糞婆、俺が俺の嬖をどうしやうとお前達の知つたことじやない」

「ホ、ハ、ハ、」とカシニヤは高笑して、

「矢張り、眞正ほんたうのこゝを云はれると腹が立つと見へるね」

「何だよば大奴！」

鑪屋はブリ／＼怒つて頬りとカシニヤに喰つてかゝるが、嘔はやし立て、こそすれ、誰もなだめる者はないので、室内は割れる程騒がしくなつた。

この時次の室から哀れな聲を立てたのは、鑪屋の女房で、半ば死にかけてゐる病人のアンナである。

「又始まつたのねえ。何うかお願ひですから……皆さんお静かにして下さいよ

……後生だから……」

之を聞くと鑪屋は、カシニヤとの争ひは止めたが、極く冷かに、

「そうら、鑪殿がこぼし初めたぞ」

「お前さん、何うかね……妾だつて、そりや毎日のことだもの、愚痴も出ますよ。何うか死ぬ時だけは静かに目を瞑らせて下さい」

「何を吠えるんだい、いくら騒いだつて死ぬ邪魔にや成りやしない」

これを聞くとカシニヤは、

「そら、こんな薄情な奴だよ、この山羊の野郎は」と鑪屋を罵り乍ら、妻アンの室に這入つて、

「お前さんの、あの鑪屋つたら、何てまア情の無い鬼のやうな人だらう、お前さん、まア何だつて彼嬖奴夫婦になつたんだね」

「矢張縁だから仕方ないわよ」と、アンナは目を閉ぢたまふ、

「何うか其際こそ云はないで彼方へ行つてお呉れ。妾は人と話すことも最う厭なんだから……」

「お前さんも我慢強いね」と、カシニヤは嘲りるやうに云つて、

「何うだえ、ちつたア胸の加減も宜くかね」

「何で良くなるものかね。もう真正に今日のうちに死にさうなんだから……」

「お前さん、夫嬖に力を落しては駄目だよ、何か食べたなら何うだね、妾はお前さんに食べささうと思つて、肉饅頭を買つて來てあるから、食べて見ては何うだね」

「何にも食べたうは無いのよ、だから折角だけ……」

「そんなに云はずに食べたなら何うだね」

「有りがたう……でも何うせ死んでしまふ者が、何を食べたつて無駄なことさ……」

「さうかれ」と、カシニヤは女同志だけに同情ある目で、震れたアンナの顔を眺め、しばらく黙つてゐたが、

「食べたう成つたら食べなさいよ、お前さんの茶碗に入れて棚に置いてあるから。真正に一個お食べよ、病氣にも良いことだから……」

アンナは、答へもせず頻りに咳き入つた。

この時、臺所からは、オプレスが、

「おい、カシニヤ。最う市場へ行く時刻だよ」

「分つてるさ」と、カシニヤは立ち上り、

「お前さん、ほんとうに氣をおつけよ」と、アンナに云ひ残し、臺所にかへつた。そして市場へ行くべく、臺所から出た。オプレスも其の後に跟いた。

【その三】

カシニヤとオプレスが立ち去ると、アンナは、

「クレシチさん」と、夫の名を呼び、

「ごこの棚に、カシニヤさんが置いて呉れた肉饅頭があるから、お前さん、そんを食いな」

饅頭はアンナの側に寄り、

「お前、食べないのか？」

「妾は食べたか無いんですよ。又食べたところで、仕方ありませんもの……」

「何故だ」

「だつて、妾は最う間もなく墓場へ行く人だからさ。それよりお前さんだけ働かな成らん軀だから食べるが可いよ」

「そんな悲しいことを云ふもんじゃない。なに病氣くらゐ少しも怖がること無いさ。直き直らア」

「何でも善いわ。妾は苦しいのだから、お前さんは早く食べて出なさいよ、妾は最うやかて……」

「そんな事無えつたら。直きだ〜、直きに起きられる時が来らア」云ひ乍ら、鑪屋は臺所にさがつた。

そして暖爐の上を見て、

「誰だ夫麼ここに寝てゐるのわ」

「俺さまだ、誰でもない」と、暖爐の上から顔を出したのは、旅役者である。

「何だ、青瓢箪か……おい役者、今日はお前の掃除番じやないか、早くおりに掃除をして終はないか」

「嘘いへ、今日の掃除はオプレス男爵だ」

「又、誤間かさうと思ふんだよ畜生！」と、鑪屋は暖爐の側に突つ立ち、

「早く降りて来て遣らないと引摺おろすぞ」

「大變な權幕だな、まるで主人のやうだ」と、役者は笑ひ乍ら、やうやく降りて来たが、掃除にけ取りかゝる風もなく、椅子に腰かけ多くの人を相手に、劇の氣焔などを吹き初めた。鑪屋は疝癪を立て、

「おい役者、一体いつになつたら掃除をするのだい」

「八釜しく云ふない。俺は掃除ごころじやない」

「何が、何うしてだ」

「俺病氣だ、掃除なんかして塵を吸うと不可ないつて醫者の注意を受けたから止めだ」

「へん甘く云つてやがるが、さうは不可ねえ」と、鑪屋は、箒を持って来て役者にあてがはふさした。その時病人の部屋では、

「クレシチさん、苦しいわ……あゝ苦しい、真正に死にさうよ」と、アンナの悲しい聲がきこえた。

鐵屋は筈を持つた儘、そこに突立つて、

「そんな事いつた所で、俺には何うも仕様が無い」

「じゃ、戸を開けて遣つたら何うだ」さ、夜店屋アラアナが云つた。鐵屋は首を振つて、

「汝は寢臺に腰をかけてゐるから可いが、俺達は床の上だから戸は開けられ無えや、それもお前の寢臺を俺に貸すなら入口の扉を開けても可いが……さうで無くては俺達は風を引がア」

「何を云つてるのだ」アラアナは聲を尖らせ、

「俺だつて戸は開けたかア無えんだ、けどお前の嫌が息苦しからうと思つて云つてるのじやないか」

「それなら餘計な世話だ、打棄つて貰はう」さ、云ひ捨て、鐵碓の前に座つてカン／＼と仕事を始めた。

役者はこれを見るさ、

「鐵屋は自分の嫌のこゝにまで冷膽な男だ」さ、咳やき乍ら、アンナの側に進みよつて、

「どうだれ、夫麼に悪いかい」

「息ぐるしくつてし、寒りさうだわ」

「それじゃ斯うしやう。お前さん廊下へ出た方がよいぜ、さうすりや、風も善く通すから、息苦しいのも少しは善くなるよ」さ云ひ乍ら、自分の腕をアンナの腕に巻いて、

「さア立ちねえ、俺が連れてつて遣らう、俺だつて病人だから……お互ひのこさだ」さ、アンナを助け起して廊下へ立ち立たが、それと出逢頭に合宿所の主人ミハイルは外から這入つて來た。

ミハイルは一番に鐵屋に目をつけ、

「朝つばらから、ガン／＼遣つてるな」

「遣つてるさ、それが何うだ」

「何うでもない」さミハイルは室内を見廻し、

「俺の噂は来なかつたかい」

「俺ア見なかつた」

「さうか」さミハイルは首を傾げ乍ら、鐘屋を見てゐたが、話頭を替へ、

「お前は何だつて夫座に廣い場所を領つてるんだい、僅か月三留の部屋代で、餘り剛愎じやないか、最う一留だけ増してやらうか」

「さうか。じや一留増すのも善いが、それより先に俺の首に繩をかけて、一思ひに縊め殺しれえ、ほんさうに吝けちなことを許り考へてらア」

「お前を殺したところで何になる？、それより一留増して貰つて、それを教會へ寄進した方がよい、さうすりやお前の罪滅にもならアよ。眞正にお前は罪の

ふかい奴だ、その證據にやお前の噂は、あの通り大病だし。それにお前のこと丸善く云ふ者は誰一人だつて有りやしない。だから罪滅しに部屋代を一留増ループルす方がよい、大体云はずさ、お前の其のガン／＼云ふ商買からして善いことア無え、入釜しくつて、人に迷惑をかけるばかりだ」

「何を吐しやがるんだ、お前は大人おきなしく仕事をしてる俺に喧嘩を賣りつけやうて考だな」

「まア、さう怒るな、物の道理を云つてゐるのだよ」

「何が道理なもんか」さ、云ひ合つてると、役者は再び入つて来て、

「おい鐘屋、お前の噂を廊下へ陣取らして寒くないやうにして来たぞ」

「ウム」と云つただけで、鐘屋は別に禮も云はなかつた。

【その四】

ミハイルは、役者を振り返つて、

「お前は仲々感心だ、善いことをした。屹度お前に酬^{むく}ひて來らア」

「いつ酬^{むく}ひて來るのだ」

「死んでからよ、神さまのお側に行けば、この世でしたときには、何處事にも一々酬^{むく}を興へられるのだからね」

「それも結構だが、どうだらうその褒美をこの世で一つ俺に呉れないか」

「そんな事は、人間の俺達には出來ないことだ」

「なに出來ないことが有るものが、俺の借金の半分を棒にして呉れ、ばよいのだ」

「そんな事云つて俺を嘲^{から}弄^{かつ}ては困る、「善」といふことについては神さまで無ければ酬^{むく}は興へられるものじゃない。お前の借金は借金で、別な問題だ、借金はやはり俺の方へ返さなさらんよ」

「フン、お前さんは、餘程喰らへれえ慾爺だな……」と云ひつゝ、役者がそこを立ち去ると、鑪屋も廊下へ出てしまつた。

後でミハイルは一人のサチンに向ひ、

「フン皆かりく屋ばかりだ、奴、俺の家を嫌^{きら}つてるさ見へるな」

「さうさ、此家は誰だつて嫌はア、悪魔でなくちや、此魔家を好く者、有りやない」

「ハ、ハ、ハ、お前は口が悪いな、俺は何で人に嫌はれる厭^{かた}があるのだ、行くところの無い無宿^{やまなし}者の世話して遣つてゐる俺じゃないか……ところでベベルは家にゐるか知らん」

「中に居るだらう、まア這入つて見な」

「さうだな」と云つてミハイルは、

「ベベルさん」と大きく呼び乍ら中に這入ると、

「俺を呼ぶのは何奴さいつだい」と云ふ聲と共に、壯者わかものベベルは出て来て、

「何だ、亭主か」

「ウム、俺だよ、ベベルさん。お前さんの見てる通りだ」

「そりや分つたが……」と、ベベルは破椅子に腰をかけて、

「お前さん金を持つて来たのだね」

「いや、俺はお前さんにチヨツクラ用があるんだ」

「そんな事は後の話だ、先へ金を受取らう」

「金を？、何の金だね」

「五留ループルの金さ、ほらあの時計の残金よ」

「時計の？、俺は覺はないが……」と、ミハイルは解ひせぬ顔をして、

「何の時計だ？」

「人を馬鹿にするない、たつた昨日のことじゃないか。人の大勢見てゐる前で

お前に時計を渡した。十留で賣るさいふ約束で。その時俺は五留しか受取つてゐないぞ。だから後の五留ループルを受取らうと云ふのだ。それに何だこは惚けやつて、お前さんなんか、そこらマゴく歩き廻つて、人に迷惑ごうたれをかける事だけは知つてるが、自分のこと、云つたら、何一つしやしない、剛垂ごうたれな爺つたら有りやしない」

「まあ、怒るない」と、ミハイルは手を揚げて、ベベルの言葉をさへぎり、

「お前さんはさう云ふが、大体あの時計だつて、正當な物じやあるまいが……」

「さうだ盗んで来たのだ」

「それ見ろ、だから俺は厭なんだ。贖品なんて、夫贖もの俺は受取ることは出来な

「受取らないつて昨日のうちに受取つてあるじやないか、だから早く五留の金を持つて来るのだ、オイ」

と、ベセルはミハイルの肩を押へて、

「そして、一体、何の用で、金も持たずに俺を探し廻つてたのだ」

「ウム、そりや用もあるが……しかしお前が、さう怒つてるさ最う用は無い、俺はかへらう」

「早く歸りやがれ、そして金を持つて来い」

ミハイルは、踵をかへし、

「あゝ何て奴等だらう。手にも足にもおへやしなない」と、眩つがやきながら出て行つた。

その後でサチンは、ベセルに向ひ、

「全く愉快だ、剛愎阿爺がうよくおやぢ、今日は尾を巻いて去にやがつた、お前はいつも剛勢で氣持の善い男だ」

「フン」とベセルは鼻で笑ひ

「あの南京野郎なんきんやらう、一体何の用があつて、此室へ戸迷ごまよふて来やがつたんだらう」

「なに、そりやお前、嬬うまを探しに來たのさ、お前のごころに居ると思つて……」

「層のごさお前は早く、あのミハイルの奴を打ち殺してしまつたら可いのだ」

「だが、俺にはそんな馬鹿なごさは出来ない」

「なに馬鹿な事があるもんか、巧うまく行きやア、嬬うまのイサリーシはお前の物になつて、その上お前は此家の御亭主様じやないか」

「そりや左うだが、俺は夫麼おやぢご厭だ……あゝ眠ねむい。よい夢を見て寝てるごころを養阿爺くそやぢめ奴起しやがつて……而し面白い夢だつたぞ、何でも釣つりをしてるごころだつた、大きな鯨くじらかなんかを釣り上げたやうだつた」

「そりや剛氣がうきだ、しかし鯨くじらでなくて、實はイサリーシだらう、ハ、ハ、ハ、」

「イサリーシなら、最さいう遂すいに釣つりつてらア、ねベセルの哥兄あにい」といつて役者が首

を出し、

「どうだね哥兄、二留許りおごらないか」

「手前は、俺の顔さへ見ると奢れ〜云やがる、意地の汚い奴だ」

「なに俺が意地が汚いんじゃない、お前が腕があつて能い金儲をするから、此際こんなこゝを云ふのだ、真正に泥棒なんて甘い商買うまだな」

「そりや資本は要もてられえし、働くこゝも要らんからな。しかし働くこゝが愉快であつたら俺だつて働くのだが、俺に奴隷ごれいになるのは堪へられねえ……さア役者出掛けやう」

と、二人は連れ立つて室を出やうとしたが、メメルは鐵屋の入つて来るのを見

る。

「おい、お前も一じよに呑みに行かないか」

「いつ俺は御免だ」

「何故なぜだ、呑助の癖に」

「呑助であらうが、俺はお前の相手は御免だ、良心もない泥棒の相手は恐れ入らア、俺らは斯う見へても立派らうまうに労働して食つて行つてゐるんだよ」

「へん、何が良心だ、そんなこゝは金持の云ふこゝだ、良心だの名譽だのつてそれが靴くつの代用にもなるかい」

「俺やお前と話すこゝは止めた、それよりも仕事をする方が愉快だ」さいつて鐵砧かなこの前に座つた、こゝろへ主婦の妹ナターシャは一人の巡禮を連れて入つて來た。

巡禮はもう五十位で、肩にぶくろに荷囊、腰に土瓶をさげ、手には杖をついてゐた。ナターシャが一同に向つて、

「この方が、今日からお泊りだから……」と紹介せうかいする後について老人は、

「へい、これは旦那衆、御機嫌ごけんよう。私はロカを申します、どうか宜しう」さ

腰をかゞめた。

この巡禮に二十餘手前に、ドレミスキーの工場から追はれて、行衛不明となつてゐたロカであつた。

【その五】

ナターシヤはロカに向ひ、

「巡禮さん、お前さんは其の戸口の方にお出でなさい」

「ハイ、之は有りがたう、老人の私は、どこでも暖かであさへ有れば、そこが故郷といふもんだ」

「面白いことを云ふ巡禮さんだわ」と、ナターシヤは笑つて、今度は鐵屋に、

「クレシチさん、お前のお神さんけ廊下に居るんだよ、打棄つて置いては不可ないわ」

「だから俺は打棄つては置かない、折々見舞つてゐるさ」

「ほんさうに、最と大事にして上げないさ不可なくてよ、お前さんのやうだつたら、お神さんは死んでしまふわ」
するさベルが横合から、

「俺、死ぬくらぬは何とも思つてゐやしない、ほんさうに少しも怖いこと無いや、それが嘘と思ふならナタちゃん、俺の心臓のまゝ、抉つて見な、ウンもスンも云はれえで俺は死んで見せるよ、ナタちゃんの手にかゝつて死ねば本望だからね、そりや俺に限つたことは無いが……」

「おや、」とナターシヤは目を丸くして、

「お前は、妙なところへ話の糸口を運んで行くのだね」

「何が妙なところだ、ほんさうの事だ」

「ホ、ホ、」とナターシヤは笑ひ、

「クレシチさん、よいかえ、お神さんを……」と云ひ残して立ち去る。

後を見送つてセベルは、
「好い女だな。だが何だつて俺には、あんなにツン／＼するのだらう」
と恍乎
さなる。傍ではアラナアがその肩を小突いて、

「云つてらア、その癖お前が臺なしにして丁ふんだらう」

「馬鹿云へ、俺はナターシヤを可愛想だと思つてる位だ、全くこんな家におくのは可愛想だ」

「なんの云つて、彼女と話してるところを姉のイサリーシに見付けられやうもんなら騒動もんだ」

「何を云やがるんだ」セベルは夏蠅さうに云つたが、不圖耳を傾け、

「誰だ歌なんか歌ふのは？」と目を戸口に方に轉じ、

「今の巡禮だ歌ふのは、夏蠅いね、ヤイ巡禮！」

「ヘイ、私を呼びましたか」と、ロカは首を羞しのべ、

「何か御用ですかい」

「なーに用は無いが唄なんか止して呉れ」

「お前さん歌は嫌ひかれ」

「嫌ひなことは無い、上手にさへ歌へば好きだが、お前さんののは聞きぐるしいや」

「さうですかい」

と、ロカは失望のやうであるが、夫れでも少しも怒らず、

「私はこれで上手に唄つてる積りだが……まア人間さいふものは、何事に限らず、自分のすることは皆善いと思ふものさ」

「そりや全くさうだよ、巡禮さん」セベルは薄笑をする。
側ではアラナアが、

「何のこつた、人の歌を夏蠅さか、淋しいさか云ふかと思や笑つてやがる、譯の分らん奴さ」

「何ださヒンヘツト野郎ー」さ、ベベルはアラナアを白眼だが、

「全く俺は淋しい、何う云ふもんだらうね、巡禮さん」

「お前さんは淋しいかい。それは妙だな。しかし淋しからう、本を讀んでゐても淋しさに勝つことが出来ないで、涙を零す人もあるのだからナ」さ、ロカは何か説法めいた話を始め出したが、そこへ最前市場へ出て行つたオプレスがかへつて来て、ベベルに酒を奢れさか、四つ這ひになつてベベルの淋しい心を慰めるから吞ませさか、八釜しく云つてゐたが、結局ベベルは承知して、オプレス等と共に出てしまつた。

その後でロカはアラナアに向ひ、

「今の人は何う云ふ人だな、私に旅行券を持つてるか何かさ、探偵の云ふやう

な事を云つてゐましたが……」

「あれは風の變つた男さ、何でも前は男爵だつたが、それが零落れてこんな處へ来てゐるさ、自分では云つてるがね、さも角罪のない男だよ。そりや時々昔の癖が退かんと見へて、役人の使ふ言葉を口に出すことがあるが……」

「さうかれ、そりや癖といふ奴は痘痕さ一しよで、一生さり去ることは出来なからなア」

「全くだれ」さ語り合つてるさ、そこへ主婦のイサリーシが遣つて来た。

イサリーシは、情夫のベベルを探しに来たのであるが、肝腎の本人が居ないので失望のあまり腹を立て、やれ室の掃除の仕工合が悪いさか、誰々は借金がいくら積つてるのに少しも拂はんさか、ガミく方々へ當り散らして立ち去つたロカは其の後でアラナアに向ひ、

「あの女は、いつも彼屢に憤々してゐるのかね」

「いつもさ。だが今日は特別だな、自分の情人をこに逢へないもんだから……」
 「成る程、それで入つ當りさ来た譯だな、いや世の中にはいろ／＼な人が居るかられ」さいひ乍ら室を見廻してゐたが、
 「お、箒ほうきがあそこに有る、掃除は私がしますよ」さ、ロカは箒をさつて部屋から出た。

それさ引違ひに入つて来たのは、主婦イサリーシの叔父に當るメドウであるメドウは巡查をしてゐる。

部屋に這入はいつて来るさ、プラナアを捕へて頼りにベベルのことを訊たづねてゐたが別に要領やうれうを得た筈はずもないので、今度は病人アンナのこゝろにつき斯う云つた。

「あの鑪屋ろやの女房は最う良よいのか」

「良よいどころか、此の頃では足も立ちやしない」

「それじや能く看護かんごをして遣らな成らん、若し急死でもすれば要らぬ審査しんさを受

けて皆の迷惑めいわくだ」

「全くだれ」さ云つてゐるさ、急に玄關の方が騒がしくなつた。これは主婦のイサリーシとナダーシヤが姉妹喧嘩けんかを始めたので、その騒ぎの爲めメドウも、プラナアも駈け出して行つた、後にはアンナと今連れて來られたロカのみ残つた。

病人は少しもロカを知らん風であつたが、ロカはアンナを一目見ひとめるさ、何故か顔の色を變へる程驚ろいた。

【その六】

「月は出で、は又沈む……。牢獄は闇さくらく……。」

あけ昏れ牢守は。我慰守る。あゝ哀れ」

歌ふ聲が折々漏れて來る。

室内では、彼等が唯一の樂とする骨牌かるたが始まつてゐる。その中に居て全然没交ぼつこう渉せうなのは病人のアンナと、老人のロカである。

アンナは、頻りに夫クレシチの無情を啣かこち、

「妾めかけさいつたら、一生の間、あの人に殴なぐられたり……苛いぢめられたりした外には樂しいことも、悦よろこしいことも、此世の味あじさいふものは知らないのですわ……」

「まア〜」とロカはこれを押し止め、

「そんなに歎なげくもんじや有りません。ねお神さん」

「いえ、妾めかけは云ふだけのことを云ひますわ、眞正ほんたうに巡禮めぐりさんは、妾めかけの友達のやうな氣がしますから、妾めかけに歎なげかせて下さい……御飯ごはんだつてさうです、腹一杯食たべたことは數かずへる程ほどしか無いのですもの。パン一片食たべるにだつて、妾めかけはいろ〜と人の知らぬ遠慮えんりよをおぼしましたよ。それ位くらいですもの着物きものなんか買かへさうな答こた

がありません。始終ホロ〜のつぎあはを補綴つぎあはせて、それで我慢がまんをして來ましたの。妾めかけはほんとうにこの世の不仕合者ふしあひものでしたわ」

「まア可あい〜。人は何も諦あきらめが第一だ。それだけの約束で生なれて來たと思おもや何でも無いことだ、しかしお前まへさんは餘程あま疲つかれてゐなさる。心を落着おちけて休やすむが可あいぜ」

「眞正ほんたうに疲つかれ果はてましたの、苦くるしくて〜息いきが切きれさうだわ……ね巡禮めぐりさん」

「妾めかけ、始終しじう氣きにしてゐるのですが、妾めかけのやうな因果いんぐわな者は冥土あいのよへ行いつても苦くるしまねばならんでせうか」

「そんな事ことはないよ、だから氣樂きらくに寝ねてゐなさい」と、ロカは臺所だいどころへさ立ち去さつた。

「守まもらば守まもれ。此この身みは逃にげじ。自由じゆうは願ねがへども。」

我が鎖はさげず。あゝ哀れ。あゝ此の鎖……」

歌ひつゞける聲と共に、骨牌は益々はつみ、血眼になつて争つてゐる。

ロカが用を濟ませて、臺所から歸るさ、オブレスの前に積み上げられた澤山の金を指して、

「お前さん勝つたね、それでウオツカでも呑みに行くのじやろ」

「ウム」オブレスは、得意らしく肯首いて、

「お爺さんも一しよに行くかね、お前さんの酔つたところが一つ見たいだ」

「そりや素面でゐる時よりか、少しは悪うなるさ」

「お前さんでも？」オブレスが語を切るさ、役者は之に代り、

「お爺さん、儂さ一しよに行かう、そしたらお前さんにワラアを聞かせるが何うだ」

「そりや何のことだね」

「詩さ、お前さんは詩は嫌ひかい」

「私が詩を聞いたところで何になる？」

「何にも成るめえが面白いよ。そりや尤も時々悲しいところも有るが……しかし俺はごうやら其の詩を忘れたやうだぞ」

「それは不可な、お前さんも間拔だハ、ハ、ハ」さ、ロカは高笑ひして、

「自分の好きなものを忘れるなんて真正に何うかしてるよ。全体自分の好きなものには、心の總てが籠つてゐる筈なのに、それを忘れるさは何うしたことだな？」

「いや巡禮さん、俺は最う其の心まで酒のために摺りへらしてしまつたのだ。斯うなつては俺も最う人生の秋かな？」

「なにお前、さう失望するものじや莫い、お醫者にかゝりなさい、今では酒呑を癒す醫者もあるから、しかも無料で癒して呉れるのだよ、だからお前その醫

者にかゝつたが可いな」

「そりや巡禮さん何處にだね」

「待てよ……」と、ロカは首を捻り、

「はてな。町は忘れてしまつたが……可い。町の名は後から思ひ出してお前さんに教へるから、お前さんは今の間に、そこへ行く支度を整へて置くがよからう。そして病氣——酒吞を癒して来て、又昔のやうな、その詩の詠へる生活に入つたら何うだね」

それじゃ、俺は又生れ替つて来るさいふ寸法だな。そんな事俺に出来るか知らんて？」

「出来ないでか。屹度出来るさ、だから左うして御覽。儂は決して悪いことは云やしない」

「諾、分つた。じゃ左うするさして一杯呑んで来る」と、役者はサチンと共に

出て行く。

その後で、アンナは、

「巡禮さん、話して頂戴よ……妾何だか胸が悪いのよ」

「そりや能くあることだ、誰でも死際には夫塵^{しにぎは}ことが有るが心配なさんな、人間は死んでさへしまへば氣樂なものだ。だから死さはずして「安息」といふのだよ、全くねお神さん。このゴタ／＼した世の中では、どこへ行つても氣樂に息を休めるところは有りやしないよ」

「それじゃ、死んでしまへば苦は無いの？」

「さうさ、苦さか辛さか云ふことは一切冥土にはないのだ、安息といふことより他には何にも無い、彼の世へ行けば、神さまは、お前さんの名を呼んで、そのお側に置いて下さるのだ、そして神さまは「このアンナは娑婆で疲れ切つて來てるから安息せてやれ」とおつしやるのだよ」

「全く、さうなら善いが……其の安息さいふものが」

お前は信仰がうすいね、人は第一に信をせねばならんよ……この老爺がお前に云ふが「死」さいふものは、私たちには丁度子供の阿母さんさいつた様なものだ、それはよく懐かしいものだよ」

「だけど、若し妾が癒つたら……」と、アンナは、今は反つて「生」を恐れ出した。

「れ巡禮さん、妾の病氣が癒つたら……？」

「お前はまだ苦み足りないのだね」

「え、もう少し許り、ほんの少しでよいから此の世に居たいの、巡禮さんの云ふ通り、冥土に苦がないものなら、この世の苦はどんな事でも我慢しますから……ねほんの暫時の間……」

「あの世は空なものだよ、さうして苦みなんかあるものか」

この時、ベベルは首を二人の方に捻ぢ向けて、

「巡禮さんの云ふ通りだ。しかし嘘かも知れないが……」と大聲を出した。すると暖爐の上でアラナアを相手に碁を打つてゐるメドウが、

「入釜しい、誰だい、怒鳴のは？」

「已だ、ベベルだ、それが何うした」

「入釜しいから怒鳴るなと云ふのだ、人間さいふ者は、さう無暗に怒鳴るものじゃないぞ」

「何だつて、棒杭野郎奴が、ヘン」と、ベベルは、威文高になる。

【その七】

それでベベルとメドウの平和が破れて互ひに云ひ争ひ初めたので、ロカは氣を揉み、

「皆さん、静かになさい、今こうして死にかけてる人が有るのだからね、御覽なさい、アンナの唇には最う死の影が漂ふてゐますよ」

「真正に阿女は死にかけてるのかい」ミアラナアが叫んだ。

「ほんさうさ、冗談に誰が此處ことを云ひますかい」

「それじゃ最う、あの厭な咳を聞かなくて可いや。あの咳を聞くと、ほんさうに、こちららも病人になりさうだからな……一つ取るぞ」

「やアしまつた、争つてる間に遣られた」ミ、メドウが叫ぶと、ベベルが、

「よい氣味だメドウ助の野郎」ミ云つたので、又々争ひに花が咲いた。

「何を云ふのだ、俺は貴様のやうな盗人にドメウ助だなんて云はれる筋はないぞ」

「じゃメドウさんか。ヘン……しかしナターシヤは何うしてるね」

「貴様、それを聞いて何うするのだ」

「どうもしないが、此前の喧嘩にイサリシは、ナターシヤを酷く殴つたさういふじゃ無いか」

「そんな事は貴様には関係のないことだ、黙つてくれ」

「俺は聞きたいから聞く迄だ、関係がないにしても聞くのは俺の自由だ」

「貴様何を吐すか」ミ、メドウは暖爐から降りて来て、

「貴様は夫塵、こゝ聞いて、俺の姪のナターシヤを何うしやうてんだ。この泥棒野郎！」

「なにツ、泥棒が何うした？」ミ二人は益々争ひ、メドウが告發してやるさうな怒れば、ベベルは、告白するならせよ、その時にはこの家の主人夫婦も、それと親類のメドウも皆巻添を食はせてやるさ嚇し、最後には掴みかゝらん許りになつた。

ロカはこの中に這入つて双方をなだめ、又ベベルに向つて、

「本當にお前さんは茲を立ち退いた方が善いぜ」

「何處へ立ち退けと云ふのだ、俺の親は二人とも牢屋で死んでしまつたし、俺は行くところが無いのだ」

「いや、お前さんの様な人の要るところがある、其處へ立ち退きなさい」

「それは一体どこだ、俺の入用なところと云ふのは……」

「シベリヤだ」

「シベリヤだ、莫迦な、彼處人殺や強盜の追ひやられる所が、何で善いところな物か、大体お爺は嘘吐きだ。あつちも善い、此方も善いさ、お前さんは誰にでも善いところを云ふが、何だか譯が分りやしない」

「そりや、お前が儂を信じないからだ、儂のいふことを信じてシベリヤへ行つて御覽、屹度お前さんには善いところだよ」

「嘘吐け」とロカの云ふことにも耳を傾けず、多くの人に當り散らして争つて

おたが、しまひには相手は大方争ひにも飽き、喫茶店へ行かうと出てしまふ。

そこへ這入つて来たのは主婦のイサリーシである。

イサリーシはベベルの傍にすり寄つて、

「ベベルさん、お前さんに一寸用があるのだが……」

「お前の用には最う飽々したよ」

「そりや御互よ、妾だつてお前には、最う飽々してるのだけ……」

「さうか、お前もか……」とベベルは、ニッコリして、

「そして用つて何處……」と云ふ。何を話すのさ

「それより先に妾は、お前にお禮をいふよ。お前さん。今真正のことを云つて呉れて有難う、妾お前に厭がられたのだわね」

ベベルは答もせずイサリーシを見詰めてゐたが、

「イサリーシ、お前は全く美しいよ、だが俺は今までに一度だつてお前を可愛

いさば思はなかつた。斯うやつて一しよに成つては居たが、たゞの一度だつてお前を美人だと思つたことは無かつた」

「そして、夫れから……」

「たゞ夫れだけのこささ」

「それと云ふのも、他に氣に入つた女が有るからだらう」さ、イサリーシは峻しさうな目でベベルを白眼へた。ベベルは平氣で、

「よしんば氣に入つた女があるにしろ、お前の世話には成らんから、安心してぬろさ」

「いーえ」さ、イサリーシは首をふり、

「お前さんは左う云ふが、妾は進んで其の世話をしやうかと思ふのだよ、お前さ、お前さんの好きな女の媒介にならうと、ねベベルさん」

「そりや、一体誰のこさだ、俺の好きな女なんて？」

「お前さん恍惚こぼけるのね、ほらあの妹のナターシヤのこさよ。彼女はお前さんの氣に入つてるんだらう、妾よく知つてるわ……でも妾は野呂間のるまよ、永い間それに氣着かず、お前さんが妾を、亭主や叔父をぢの手から救ふて自由な身にしてくれると許り思つてゐたのよ、それを思ふとくやしいか……」

「だつてお前が、釘で、俺は釘拔くぎぬきさいふ譯じやなし、お前を勝手に引き抜いたり、連れ出したりするこさは出来ないじやないか……しかしお前は酷ひげくナターシヤを殴なぐつたさ云ふじやないか、酷い女だ、これから先彼女に手向ひでもしやうものなら、俺が承知しないから左う思つて居れ」

「まアお待ち、そんなに怒つたら話がしにくひよ、ねベベルさん、妾たちは互ひに助け合ひをしやうじやないか、妾はお前さんとナターシヤを夫婦にして上げて、其の上、要るだけの金を上げるから、その代り妾をも救ふて貰ひたいのよ」

「お前を救ふといつて何うせよと云ふのだ」

「妾を、亭主の手から救つて、自由にさせてさへ呉れ、ばよいのさ」

「では、俺に、ミハイルを殺せといふのか」

「さうよ、でも何もお前さんが手を出さないでも、人を使つていくらでも遣れるじゃないか」

「お前も、ミハイルの嬬だけで、仲々の悪黨だ」

「じゃ、妾の云ふことが解つたのだけ、屹度、妾を救ふて呉れる？」と、イサ

リーシが燃へるやうな目でベベルを見た時、亭主のミハイルが這入つて来た。

ミハイルは嫉妬の爲め聲をふるはせ、

「お前たちは二人で……唯二人で何をしてゐるのだ、イサリーシの恥知らず奴又亭主の顔へ泥を塗つたな、この淫婦！」と、ミハイルはイサリーシの胸を捕

「最う寝る時分なのに、蠟燭へ火をつける事も忘れて……さア、早く彼方へ行け」と戸口の方に突きやる。

イサリーシは、凄惨な笑をしながら出て行つた、其の後にベベルは、

「おい貴様も出て行かんか」と、主人に怒鳴つた。

ミハイルは怒りの目を光らせて、

「何だ、出て行け？、俺は此の家の主人だぞ。貴様こそ出て行せ、この泥棒奴」

と踊りかゝつてベベルの首を捕へた。

この時、暖爐の上で欠伸する聲が聞えたのでミハイルは、手を放し何か罵しり乍ら出て行く。

ベベルは暖爐の上を見上げて、

「誰だ、そんな處に居るのわ？」

「儂じゃ」と、聲に應じて首を出したのはロカである。

【その八】

それを見るさべルは、

「畜生！早く降りれえ」

「よし／＼、今降りるよ」さ、ロカは落着いて降りて来た。

「何だつて、お前彼處どころに寝てたのだ」

「何處へ行けば善いんだか、儂には此處の勝手がまだ能く分らないから……」

「玄關の方へ行つて寝たら可いのじやないか」

「あそこは、儂のやうな老年には寒過ぎる」

「フム……」さべルは妙な聲を出して、しばらく黙つて居たが、

「巡禮、お前聞いてたな？」

「聞いたさとも、何も角も聞いてたさ、儂は聾者じやないから……だが若衆

お前は、ほんとうに幸福者だしやせもの

「何が幸福なのだ」

「私が、茲に居ないで、暖爐の上に寝て居たので幸福さいふのだ、儂はお前さんのやうな獨身者の幸福を陰で聞き乍ら……けご實は、お前さんが今の亭主を殺しやしないかさも思つたさ」

「さうさ、場合によつては殺しもするさ。彼奴は心から厭だから」

「そりや左うだらう。何でもないことだし、又世間にはよくある事だ」

「世間によくある？」さ、べルは何さなく笑ひ乍ら、

「お前さんも、さう云ふことを遣らかしたことが有るのだな？」

「まア若衆わかいしやう、儂の云ふことをお聞き。第一にお前さんは今の亭主の嬬を遠ざければならん。さうすれば彼奴は、屹度今に自分で亭主を殺すに極つてる、お前よりも、もつと／＼上手に殺すよ。お前さんはあの女の云ふことを聞いては

「不可ない。あれは真正に鬼のやうな悪い奴だ。僕も彼那女にかゝり合つて懲々したことが有るよ。この頭の白毛かつて皆其奴の爲めだ、あの女は全く性の悪い奴だよ」

「お前さんの云ふことは俺には能く分らんがなア」

「まアお聞き、そりや分らんだらう。しかし僕の云ふことを聞くがよい。若しお前さんの氣に、あの鬼のやうな女が氣に入つてゐんなら、一緒に連れてどこへでも遁けなさい。一日も早く……」

「僕には分らん」

「分らなくても善いさ、人間さいふ奴は腹の虫の工合で生きてゐるんだから、今日の善人は明日の悪人さ。若し又あの娘つ子が氣に入つてゐんなら、其の方を連れて逃げなさい。それさも兩方さも氣に入らないなら、一人で逃げるだけのことだ、若しお前さんだから、嫌はこれから先、何處でも貰へる」

ベルはぼがんとして、

「何故お前さんは夫麼こゝを俺に云ふのだね」

「その譯も云ふが、まア一寸お待ち、先へアンナを見て来る」と、ロカはカーテンの中を覗いて、アンナに觸つて見たが、

「噫」と歎聲をもらし、

「マノンに遂々僕に氣着かず天国へ行つてしまつた。昔の戀人を知らぬ程マノンは病衰してゐたのだ」と涙と共に、

「エス、キリスト様、只今永久の眠に入りし、貴方のお子を恵みたまへ……」と、祈り出した、このアンナは變名してゐるが、二十餘年前にロカと同じ工場に働いてゐたマノンの成れの果であつた。何うして今の境遇に陥つたのか、それを知る者はマノンのみで、亭主の鑪屋も知らぬ。ロカは素より知りさうな筈もなく、又之を尋ねる機會もなかつた。

ベベルは後から跟いて来て、

「死んだのか？」

「ウム、到頭往生を遂げてしまった。この人の亭主は居らんのか」

「居ないが、大方酒店に行つてゐるんだらう」

「そいつは早く知らせてやらな成らん」ミロカが歩き出すと、ベベルは、

「俺も一しよに行かう」

「恐いのかね」

「死んだ者は厭だ」

「さうだ、死人を愛しても仕方ない。それより生きてた者を愛さな成らん。生きた者をだよ」と云ひ乍ら、急ぎ出て行く。

その後へ扉を荒々しく開けて、

「おい、巡禮さん居ないのか、俺は詩を思ひ出したぞ」と叫び乍ら役者が入つ

て来て、

「斯う云ふのだ……世の人よ、この世の眞の道を索め得ずば……世に黄金の夢に憧るゝ愚人こそ羨しけれ」……おい爺さん「明日にも太陽の光消えなば愚人の思想は世界に周からん」……おい爺さん聞いてるかね」と、一人悦に入つて、まだ後を詠ひつゞけやうとした時、

「おや、大層な御機嫌だこそ」といふ、ナターシヤの聲に遮られ、

「ヤアお前さんが、そしてあの善いお爺は何うした？、まア何でも善い、俺は行くのだ、ナタさん左様なら、皆さんも左様なら……」と、云つて再び戸口の方に向ふ、ナターシヤは其の前に立ち塞り、

「おや、お前さん何處へ行くのさ」

「俺これから出掛るのだ。最う暖かくなつたから……町を探しに行くんだ、お爺さんの云つた、病氣をなほす町を……お前さんも一しよに行つたら何うだ

そして一層のこと尼寺へでも入つたら……酒呑を直す醫者があるんだ。そこは食^たべることもロハだよ、其の病院ではね……おつと俺は最一つ云ふことを忘れてる。俺には此家では名がなかつたが、俺の名はスヴェルチエフと云ふのだ、……ヘン、名のない者は何處にだつて有りやしない。まア左様なら……」と怒者はヨロ／＼し乍ら戸口へ向ふ。

ナターシヤは、之を止め乍らアンナの方を見て居たが、

「おや、あの人は死んでるよ」と叫^{さけ}んだ。役者は立ち止り、

「そんな急なことが有るものか、お前の見損なひだ」

「いえ、眞正^{ほんたう}よ。ほら御覧なさい」と、役者を誘ふて二人でカーテンの中を覗^{のぞ}いてゐる後からアラナアが、

「何を見てるんだい」と聲をかけた。ナターシヤは、

「死んだよ、アンナさんが」

「じゃ、最う咳^{せき}をしないで樂だ」と、自分の寢臺の上に座り、
「しかし宿六に知らせて遣らな成るまひ」
「俺が行つて来る、俺は知つてるからクレシチが呑んでる所を……」と役者は色を變て駈^かけ出した。
寂寞^{さむさみ}となつた室の中に、ナターシヤは唯一人立ち、
「あゝ、いつか妾も、この地下室で……打殺されることだらうよ……」

【その九】

「何を云つてるんだ」と、アラナアは寢臺の上から聞きこがめた。ナターシヤは、

「何でもないことよ……獨語^{ひとりごと}だ」

「獨語なものか、今のは嘘言^{うそごと}だらう……さころでお前は夫麼^{なん}さころに立つて誰

を待つてゐるのだ、ベベルか？多分さうだらう。今に見る、お前は屹度ベベルに打ち殺されるから……」

「誰に殺されたつて同じことよ、彼の人になら一層本望ほんもろうかも知れない」

「それやお前の勝手だな」さ、ブラナアは横になつた。

ナターシヤは、ちつとアンナの死顔を見詰め、

「アンナさんは死んで善いことをした。だけど可哀想かあいさうよ。ほんとうに人間さういふ者は何しに生れて来たことやら分りやしない」

ブラナアは又起き直り、

「生れて死ぬ迄のことさ、お前だつて俺だつて、又そこに死んでるアンナだつて同じことだ、死んだからつて、何も悲しむこと無い、たゞ俺達より一足先へ行つた迄のことだ」と云つてゐる所へ、アンナの夫のクレシチも、又これを呼びに行つた者も一しよに、ドヤ／＼と歸つて来た。

ナターシヤは、これを見ると、

「お静になさいよ。アンナさんは死んだのだから……」

「死んだら天国だ」さ、メドゥは叫んで、

「擔かたぎ出さればなるまひ、れ支關かつかんへでも……此室こむろは死人を置くところじや無い生きた人が起臥おきふしするところだ」

「擔かたぎ出さう」さ夫をつとのクレシチは答へながら、アンナの側に寄つて、人の肩越かたこにそつと死顔を覗く、メドゥは、

「いくら覗のぞいたつて靈は出やしないよ、この女は生きてゐる時から干燥ひからびて居たんだから……」

「さうだつた、真正ほんたうに死んだ様な奴だつた」さ、夫のクレシチも、其の他の人も、一言も悔くやみなんか云はうとせぬ。ナターシヤは、

「まア、何て呆れた人たちだらう。誰か一人位は、可愛想だと言云つてやつ

ても善さうなものに……この人たちは真正に……」

すると、ロカはナターシヤの肩に手を置き、

「姐さん、そんな事は、この人たちに何干云つても駄目なことだよ、この人達に、死人を可愛想だと思へさ云つたところで其れは無理だ。この人たちは生きてゐる人間さへ愛することを知らぬのじや、他人ばかりじやない、自分自身をも哀れむことを知らないのだから……そんな事を云つても仕様ない」

アラナアは依然として寢臺に座つたまゝ動かす、時々欠伸をしてゐる。メドゥはクレシチの袖を覗いて、

「おい、警察へ早く届けなくちや成らんよ。さうでないさ手前が打ち殺したやうに思はれるぞ」

「それもさうだが、俺が第一に困るのは葬をする費用の無いことさ」

「それなら借りたがよい。若し借ることが出来なければ、皆が、少し宛持寄つ

て、其の方は片付けるさ。だから何より先へ届けることを怠つては不可」

「じや、警察の方を先にしやう」

とクレシチが、戸口の方に行くさ、多くの方は、死んだ者には頓着ないさいふ風で、皆各自の寢臺の方に行く。

後に一人ナターシヤは、

「妾は又今夜、アンナの夢を見るのだよ。死人があるさ、屹度妾はその人の夢を見るのだから……」と身を震はせ、

「一人で廊下へ出るのは怖いやうだわ。暗いんだもの」とおびへて居る傍からロカは、

「お前さん死んだ人は少しも怖いことないよ。それよりも生きた人を怖がらなくちや成りません。僕は滅多に嘘は云やしない」

「生きた人も矢張怖いのね」と、ナターシヤは後の方を見て、

「巡禮さん、妾をそこ迄送つて頂戴よ」

「諸々、どこ迄でも送つて上げやう」さ、ロカミナターシヤの二人が出て行つた後で、役者は一寸死人の方に目を呉れ、

「アンナは死んだ、これで吞助のクシレチも、厄介者が無くなつたさ云ふものだ」

「さうさ」ミアラナアは寢臺に腰掛けたまゝ、

「奴さんも、之からいくらでも忘れ次第、欲放題さ云ふ寸法だな」

今まで黙つて、欠伸を噛み殺してゐたサチンむくく起きて、

「大体云ふと、吾々の連中で——宿無仲間でき、嫌といふやうな者を連れるのが間違つてらア、無用の長物だからな」

「お前の云ふ通り——」ミアラナアは大きく肯首き、

「全くお前の云ふ通り無用の長物だ、厄介者だ、それにさ、クレシチの様な野

良苦良者が、よく今まで棄てもせず續けて来たものさ、死ぬ時までも……」

「くされ縁だつたのだ」さ隅の方でメドウが唸つた。

これで、死人の話は中止となつたが、さて誰も之を廊下へ昇ぎ出さうとする者はない、一番最初に云ひ出したメドウでさへ、さう云ふことは厄介極まる手間ださ云ふ風で、寢臺の上に仰向になつて、手足を伸べた。

廣い汚ない陰氣な部屋が恐ろしく静かになつて、遠い方に人の歩く足音がしてゐる。

多くの人は云ひ合はせた様に寢臺の上に寢轉んだ。

役者だけは、寢轉びもせず、アンナの死顔を見詰め、遠くの方の足音を聞いて立つて居たが、

「善い巡禮さんのロカが歸つて来る足音だ。俺は總ての人の足音によつて、其人を云ひ當てることが上手だが、殊にロカの足音が一番善く分る。ロカは、ナ

ターシヤを送つて行つたのだが……彼のナターシヤは一体誰の者になるだらうか」さ、獨語を始めた。

ブラナアは起き上つて、

「やい、青瓢箪、何たばやいて居るのだい」

「なに、ナターシヤが何うなるだらうと云つてるだけさ」

「フン」さ、ブラナアは鼻で笑つて、

「定つてらア、彼女はベベルの者さ」

「さうかなア」

「最うちやんと定つたことじゃ無いか」さ、ブラナアが再び寝轉ぶと、

「何が定つてるのだ」さ、メドウが起き上り、

「おい、ブラナア、何がちやんと定つてるのだい」

ブラナアは返辭もせぬ。

役者は之に代つて、

「なにさ、ナターシヤが——お前の姪のナターシヤが、ベベルの者に定つてるさ云ふのさ」

「何だ、ナターシヤがベベルの者だ、馬鹿云へ、可愛い姪のナターシヤを、あんな泥棒の者にして溜るものか、手前達やベベルを一体何者だと思つてるのだい」

「ベベルかい、そりや腕があつて、善い金儲をする野郎と思つてらア」

「金さへ儲かりや泥棒しても善いのかい、唐變木奴」

「この仲間じゃ、まア善いさしたものだ。だからナターシヤも幸福だらう」

「まだ、其れを吐す、誰が何と云つてもナターシヤは、泥棒の娘にや遣らないぞ、叔父の俺が第一に反對する」

「お前さんがいくら反對したところで、ナターシヤには自由があるからなア……」

……しかし俺はベールの味方をしてお前さんと争ふ必要はない筈だ」といつて
 役者は口を噤んだ。

それでもメドウは、承知せぬらしく、まだ何か云はふとする所へ、ロカが歸つ
 て来た。

それと見るにメドウは、急に狸寝をして知らぬ顔をする。之はロカが死人の爲
 めに祈禱きとうも始めるさ、其れに引出されるのを夏蠅うるさく考へたからであらう。

ロカは案の如く、老人らしい態度と音聲で、祈禱を始めた。多くの寢臺からは
 急に軒聲いびきこゑが起つた。

【その十】

アンナの葬こむらひが済んでから彼此かれこれ一月にもなつた。

残雪の中に芽を吹き出した野草も、此の頃では一寸許りに伸びて、空や林では

鳥の歌ふ聲さへ聞え初めた。

寒い時には、着物と仕事が無いので、止むを得ず冬籠ふゆごもりをしてゐた貧民合宿所
 の連中も、此の陽氣やうきの爲めに、そろ／＼忙いそがしく成つて、麵麩めんこを得る爲めに、
 朝から晩まで町に出る者が多くなつた。

或る日——それは空そらの能く晴れた、うら／＼かな日であつた。

いつもの部屋べやには、ロカと役者が二人、取り残された如に居残つてゐる。

「おい若衆さん」と、ロカは、寢臺の上に手を伸べて寢轉んでゐる役者を振り
 返つて、

「最う善い時候になつたぞ。お前さん行かないのかい」

「ウム、俺も最う行かうと思つてるのだ」と、役者は起き上つて、

「病なほを癒すには、善い時候だからなア」

「さうさ、だから僕は、一日も早くお前さんが立つのを待つてるさといふ鹽梅式あんばい

だ。この前にも云つた通り、あの病院では何もかも、無料で遣つて呉れるのだから、お前さんの様な者には持つて来いのさころだ」

「そりや大きにさうだ。だから俺は行く、近いうちにな」

「それが善いぞ、お前さんの様な生若い軀をし乍ら、アルコール中毒ださか何ださか云つて、此處こゝに遊んでゐては利益ためにならん。早く行きなさい」

「行くよ、最うちやんと決心をしてるのだから……」と、それで暫時二人の話は途切れたが、役者はロカの傍に近よつて、

「善い巡禮さん、お前さんも行くのだらう」

「儂わしかい」

「さうだ。善い巡禮のロカさ」

「行く。が何所へ行くかお前さんには分つてやすまひ」

「そりやお前さんが云つて呉らないから分りつゝは無いさ、一体どこへ行くの

だい、お爺さんぢいは？」

「實を云ふと、儂にも分らんのだよ」

「ハ、ハ、ハ、」と役者は笑つて、

「可笑おかしいんだな、自分の行くところが自分に分らないのか」

「そりや分らん。又分りさうな筈が無いよ、大体この世の中のこと、云ふものは、何一つとして分つた物はないのじや、だから儂の行くところが、儂には分らぬさ」

「何だかお前さんの云ふことは、謎なぞのやうで薩張俺達には呑み込めぬ。しかし俺の病氣を癒す病院だけは、お前さんのお陰で能く分つたよ」

「それさへ分つたさすれば、お前さんには幸福しやはせじや無いか、ナ若衆わかいしう、儂は人の幸福を悦ぶだけの事が分つさる」と、言葉を切つて、

「何しろ、お前さんは一日も早く行つた方が善いナ」

「じゃ、今日のうちにも立つさしやうか」

「たつた今から立つ方が猶更善い」

「それでは支度を整のへやう。何だか今日は俺の爲めに吉日のやうな氣がするから……」

と、云ひ残して役者が出て行つた後へナターシヤが這入つて來た。

ナターシヤは戸口に立つた儘、

「おや、今日は大變靜かだね」と、ロカと顔を見合せてニツとする。

ロカは手でナターシヤを招き、

「姐さん、まア此方へお出で」

「何か用なの？」

「ちよつくらお前さんに相談のしたいことが有るのじゃ」

「妾に？」と、ナターシヤはロカと並んで座り、

「何麼御用？」

「儂が話す前に、お前さんに尋ねたいことが有るが……お前さんは、此家に居ることを、自分の幸福だと思つてゐるかね」

「それは云ふ迄も有りませんわ」

「左うだらう〜」と、ロカは大きく肯首いて、

「儂にもお前さんの心持は、ちやんと分つてゐるさ、お前さん眞正に氣の毒な身の上だ……、心の安まる日さては、一日だつて有りやすまひ。だから、儂は、始終お前さんを、氣の毒な娘さんだと思つてゐるのだよ、これは儂が初めて此の家へ來た時から、さう思つたことだが……」

「え、巡禮さんの云ふ通りよ、妾ほんとうに、此家に居ることを、恰で責道具の上にも座つてゐるやうに思つてゐるのよ」

「だから、生きた人が怖いさ儂が前に云つたのだ。お前さんは、あの日死んだ

アンナを怖がつたか、何うだね、死んだ者は何にもすまひ」

「え、生きた人は日々慮めますげだね」

「さうだ。しかし苛められる間はまだ幸福だ、しまひには最う苛められなくなるよ、その時は不幸のどん底に陥つた時だ」

「それは、何の事なの？」

「殺されてしまふことさ」

「殺される？誰が？」

「今苛められてる人が……ね娘さん。殺された後は、最う苛められることも無いから、不幸のどん底は、幸福のつべんかも知れぬが、しかし殺されると云ふことは詰らんことだ、だから生きてる人は恐れて逃げねばならん」云つたが、急に言葉を代へて、

「いや、之は話が十分先の方へ飛んで行つてしまつた、ハ、ハ、ハ、まあ寛乎話

さう。お前さん急ぎやしないか」

「え、別に急ぐことも有りませんよ、是からお午迄に二十許りの皿を洗へばお終ひですから……」

「じゃ、寛乎出来るね」と、ロカは彼の癖の通り二つ三つ首を振つた。

【その十一】

ロカは、ナターシヤに向つても、相變らず容易に人には解せぬやうなことを永々話して居たが、聽て、

「お前さんは、彼のベベルと云ふ若衆を何う思つてる？」と尋ねた。

ナターシヤは、別に考へることもせず、

「何さと思つてはしないわ、たゞの此家のお客さんで、金放の良人だと思つてゐるだけです」

「それやお前さんの云ふ通りだ、彼の若衆は金放が良い、そして男前だつて此家に居る總ての人に勝れてゐる」

「でも、彼の人は泥棒をするのでせう」

「そりや泥棒もする、だが彼だつて生れた時から泥棒じや無かつたのだよ、立派な心を神さまから授かつて生れて來たのだが、此のゴタ／＼した世間さういふものが、彼の男を泥棒にして終つたのだ。泥棒したつて彼に何の罪があるものか、泥棒して罪のあるのは、金持や役人のことだ、これ等の人は泥棒をしなくても生活して行けるのだから、悪いことをすれば罪がある。けれどもベベルの如き人は、よしんば泥棒をしても、少し位科は有るか知らんが、さう咎め立てする程なことはない、此の世にも罪があるのだから、姐さん、人殺をするの、他人の物を盗るの、お前さんは何方が罪が重いと思ふ？」

「そりや定つてゐるじや有りませんか、人殺しは重いわ」

「さうだらう、だから食べないで鐵道往生をしたり、首吊をしたりして我を殺すより、社會の罪を身に受けて泥棒するベベルに罪はない、いや有つても其れは軽い、彼の男は儂達から見れば氣の利いてゐる男だよ、だから此家にゐる連中は皆、ベベルのことを哥兄といつて敬まつてゐるさ」

「巡禮さんの云ふことは、分つた様で分らないわ」

「まア、分らないや分らないでも善いさ、泥棒の講釋なんかお前さんに話したところで、初まらんことだからなハ、ハ、ハ、」と、ロカは高笑をしたが、

「しかし之も、少し話しく置く必要が有つたのだ。兎も角お前さんはベベルを善い人だと思ふか、それとも憎い人だと思ふか？」

「別に憎む理由が有りませんから……」

「諾々、それで良い。それでベベルも悦ぶだらう……」と、ロカの言葉がまだ終らぬうちに、

「誰だ、ベベルく、俺のことを噂してるのわ？」と、云つて本人のベベルが
入つて来た。それを見るロカは、

「お、若衆、丁度善いところじや」

「何か丁度善いところだい」

「まア、何でも善いから、此處へ掛けなさい」

「俺に命令を下すのか」

「お前のよろこぶことを話して遣るのだ」

「嘘云へ巡禮、俺はこの世の中で喜ぶことの出来ぬ人間だ。日の照る下では、
向むかを向いて歩けない様な、俺に何でこの世の榮光さか喜悅さか云ふものがあ
るか。俺は夜の男だ、昏闇くらやみの男だ。何も角も俺の目には闇黒あんこくに見へるのだ、眞
黒くろに……」

「お前さんはさう云ふが、昏闇くらやみの中なかでも灯ひのまわりだけは明るいで。その灯を

お前さんのために黙もくさうと云ふのだ」

「灯ひを持つても俺は目をつむつて歩くから矢張、暗いことに變りはない、俺は
死ぬ迄昏闇くらやみの男だ。けれども人には負けないぞ」と云ひ乍ら、ナターシヤとロ
カの中に割込み、

「何だ、俺の喜ぶことつて、聞くだけは聞いても善い」

「やつぱり聞きたいのだらうハ、ハ、ハ、まア善い、寛乎ゆづくと話さう」と、ロカ
はナターシヤに向ひ、

「姐さん、最前の話を續けて行くか……」

「妾めかけに？」

「さうだ、お前さんが先客だ、お前さんの方を片付けてしまつてから、次に此
の若衆わかしうの巡番となるのだ……でお前さんは今の男を憎くいとは思はないのだ
わ」

「え、そりや何遍云つても同じことですわ」

「それでは最う話は極つた様なものだ」さ、ロカは獨り莞爾々々乍ら、

「實はね、其の男がお前さんを自分の女房にしたいと云つてゐるのだ」

「妾を女房に？」

「さうだよ、この事は大層善いことださ儂は思ふのだ。お前さんと、其の男さ夫婦になれば、お前さんも此不安な危い束縛から遣れることが出来るし、其の男だつて、この邊をホツキ廻して昏闇の生活をしてゐなくても、自由な、そして明るい世間に出られるのだ」

「だつて妾は……」さ、ナターシャは一寸ベベルの方を見て、

「その人を憎いとは思つて居ませんが、又、今までに一度だつて好きな人だと思つたことは有りませんもの……」

「何うしてだれ」

「何うつて別に理由は有りませんけど……」

「それそこ食はず嫌ひさ云ふものだ、あの男はお前さんは一番よい夫である、し、お前さんは又、あの男の一番善いお神さんだ。お前さんは早くあの男と夫婦になつて、此家を逃げ出さな成らん」

この時、ベベルは頓狂な聲を出して、

「ヤイ老爺、お前要らぬ、こゝを吐すな」

「儂が要らぬことなもんか、儂は二人の幸福のために、どうしてでも此の話を纏めやうと骨を折つてるのだよ」

「それが要らぬお世話ださいふものだ、茶瓶お爺奴！」

「お前さんは、何だつて、さうブリー／＼怒るのだけ？」

「知れたこつた、俺の思つてるナターシャを、お前要らぬ世話を焼いて人の鼻に賣り付けやうささらすのだらう。現在俺の目の前に置いといて、何といふ剛

「酒なことをさらすのだ、ウヌ！」
 さ、ベベルは拳骨を堅めて立ち上つた。
 ロカは落着きはらつて、
 「まア待ちなベベル、お前さんは剛巧な男にも似合はぬ、感違ひをしてるやうだ」

「なに感違ひも糞もあるか、俺は人の一人や二人殺すことは屁とも思つてゐないのだぞ、さア何うするか見て居ろ」

「まア待てと云つたら、お前、俺がこの姐さんの夫にしやうと云ふ男を誰だと思つてるのだね」

「そんな事俺の知つたことが」

「それだからお前は怒るのだらうが、おい若衆、その男と云ふのはお前さんのオコだよ」

「へエ？」

さ、ベベルは、握り堅めた拳骨の遣り場に困るさ云ふ風である。

ロカは大口開いて笑ひ乍ら、

「だから早まつたことをしないで落着いてゐなさい」と、ベベルを再び椅子に腰掛けさせ、

「ネ、若衆解つたかい、俺はいつも云ふ通り、お前さんを此所から逃げ出ささうと考へてるのだよ、お前さんは、此處を遁げ出して、最つと自由な、そして最つと明るい社會へ出て、働きなさい。さうすれば、お前さんには屹度安心さういふものが授けられるから……」

「俺や、夫座ことを聞うとは思はない」

「じゃ、何と云つたらお前さんは得心するのだね」

「分つたことだ、俺の聞きてえのけ、ナターシヤを俺の婦にするさ云ふたこと」

が真正であるか、何かと云ふことだ」

「さうか、それなら安心しなさい、僕は嘘は云はないから……な」

【その十二】

「諾し真正だね」さ、ベベルはロカに念を押してナターシヤに向ひ、

「此のお爺が云つた通り、お前ほんとうに俺の嬬になるのか」

「え」とナターシヤは、ベベルを見詰め、

「そりや、お前さんの女房になつても良いわ」

「じゃ、お前は夙から俺のことを思つて居たのだな？」

「いえ、それは違ひますよ、全くのことを云ふと、妾はお前さんのことなんか一寸も思つたことは無かつたわ」

「じゃ、誰のことを思つてたのだ」

「誰のことも……。妾は、まだ誰も思つたことは有りやしないの」ベベルは詰らん様な顔をして、

「俺が今までに、彼れだけお前の爲めに、盡して居た心が、お前には分らなかつたのだね」

「妾は、お前さんが、他の人よりも少し位妾に親切であると思つたことは有つてよ、だからお前さんを憎い人だとは考へたことは無かつたが、又なつかしい人だとも思つたことは無かつたの」

「お前も、譯の分らん女だ」さベベルは吐き出すやうに云つたが、

「でも可いや、今日のやうにお前が心から、俺の嬬になることを承知して呉れりや、それで俺は幸福者と思はな成らん。お前もう今日から俺の嬬だよ」

「分つてるわ」

ロカは、居眠りする様な風で控へてゐたが、

「おい、若衆」さべベルを呼びかけ、

「お前さん、ナターシヤを一生捨てちゃ不可ないぞ」

「宜いとも、俺はアンナの様な目には決して逢はしめない」

「それからお前さん、最う此家に居ちや不可ない。儂の云つた如に、自分の好いた女の手を曳いて、遠いところへ行つて終はな成らんよ」

「それは又別な事だ」

「何？何うして別なことだナ」

「お前さんは、ナターシヤを俺の婦に世話して呉れたから、それでお前さんの役目は済みだ、この餘のことは、最う要らぬ世話だ」

「何と云ふ禮儀を知らぬ男だらう」さロカは目を睨り、

「自分が躍り出す程な嬉しいことを儂に取持つて貰つて、お前さんは禮の一つも云ふことの出来ない男かい、呆れてしまふ」さ云つてゐるころへ、

「ナターシヤ、ナターシヤは来て居ないかれ」さ云ひながら、主婦のイサリーシが遣つて来た。

イサリーシは門口に立つて中を覗くと、

「矢張り茲に来て居よる」さ忌々しきうに云つて、

「ナタさん、お前用も打棄つて、茲に何をしてゐるのだれ」

ナターシヤは座つたまゝで、

「妾此室を掃除に來ましたのよ」

「座つて居て、能う掃除が出来るこつた、掃除は着物で、遊ぶのが中實なんだらう」

「あら、夫座こそ無いわ、御覽な、ちやんと部屋は奇麗になつさるでせう、姉さん」

「フン」さイサリーシは横を向き、

「大体お前さんが此處を掃除に来るさいふのが詰らんことさ。こゝは他人に貸してある所だから、汚きたくなればお客さんが勝手に掃除をするだらうじやないか、お前は臺所の手傳てつたひをすりや、それで善いんだよ」

「ハイ、分りました」さ、ナターシヤは輕佻へうきんに云つて、

「でも最う臺所にはする用は無いでせう、午ひるまでは……」

「人間の家に用の無いさいふ事があるものかれ、お前も此の頃は餘程のち野良のらになつたのね」

「いえ、初めから斯うよ」

「お喋しゃべりはお止しよ、そしてトツトと臺所へ行きなさい……八釜やっかんしい女めつて有りやしない」

イサリーシが斯う云ふと今いままで黙だまつてゐたベベルは、

「八釜やっかんしいのは貴様のことだい、貴様こそ妹をウロうろくさ探し廻まわつて居やがら

ねえで、主婦なら主婦らしく臺所の用をセツセささらしたら善いのだ」

「おヤツ」

さ、イサリーシは四角な目でベベルを白眼にらまへ、

「お前さん、厭いやにナタさんの肩かたを持つじやないか」

「持もつたが何なにうした糞婆くそは、め奴め」

「ハイ、妾めかけは糞婆くそはの八釜やっかんし屋やよ、だがそれが何なにうしたね」

「目觸めさわになるから引込めさ云ふのだ」

「おや、お前さん、今日は大層強いのね」さ云ひ乍ら、イサリーシは部屋の中に這入はいつたが、まづナターシヤの肩かたを掴つかみ、

「お前も、いつ迄愚圖ぐづ々々してゐないで、早く立つて行かないかれ」を引き立てやうとした。

これを見るさベベルは、

「ヤイ、何をさらすのだ」

「何つて、お前さんの聞いてゐる通り、用事をして行けと云つてるのよ」

「用事をしに行けた？へん」

さ、ベベルは嘯うそぶいて、

「今から先、そのナターシヤに指一本でも觸れて見ろ、俺が承知しれえから」

「えッ、何ですこ、妾の妹に妾が用を云ひ付けるのが、それが何だね」

「何も糞もあるか、ナターシヤは今日から俺の嬬こなんだぞ」

「お前さんの女房？さう、それは一寸も知らなかつたわ」さ、イサリーシは厭いや

味らしく笑つて、

「其那約束いつしたのだね」

「いつしやうが要らぬ世話だ」

「そんなに怒らないで、妾にも聞かせたら何う？ナターシヤはお前さんの女房

か知らんが、妾には骨肉こつにくの妹じやないか」

「何を吐すのだ、この剛垂がうたれは婆」

さ、ベベルは怒鳴るだけである、ロカは向き直つて、ベベルとナターシヤが夫婦の約束をしたことをイサリーシに話し、

「さう云ふことじやで、お前さんも快こころよく二人を夫婦いっしょにさせて上げなさい」と

附け加へた。

イサリーシは、要らぬ世話を焼く阿爺ぢいさんだといふ様な目でロカを見、又押へ

難い嫉妬しつこの眼でベベルとナターシヤの顔を等分に眺めて居たが、それでも言葉

だけは優やさしく、

「それは善いことだね、妾もねロカさん、この事はもう一月も前から思つて

居たことで、ベベルさんに勧めたことさへ有つたのだよ」

「じゃ、お前さんだつて、この事に不服はないだらう」

「不服どころか、真から妾は目出たいことだと思ふわ」
 「それなら猶さら結構なことじや」と、ロカは安心したやうに、吐息をもらした。

けれども安心したのはロカ一人だけで、其の他の者の胸にはいろ／＼な形をした黒い影が動いてゐた。

ペベルはナターシヤを手に入れたについて、何うしてイサリーシこの腐縁を切つたら良からうと考へるし、イサリーシは燃えん許りのこの嫉ましさと、口惜さを、何うして酬ふたものかと焦れるし、ナターシヤは又、既に、姉の胸中を察して、何うすれば恐ろしい報復の手から遣れることが出来るかと安じるのであつた。

【その十三】

イサリーシが、ナターシヤを連れて出て行つて間もなく、自稱男爵オプレスが能い機嫌で歸つて来た。

「俺が一番早く動きに出たが、歸るのも俺が一番早い。な巡禮、早ければ、又早しじや……さうだらう」

「大きに左うじや、何でも早く出て早く歸つて來が者が一番懶巧だ、日が高く上つてから、のらくらと出て、日がな一日働いてゐるやうでは、不可ませんでな」

「俺は、いつも左う思つてゐる、割合に短かい時間を働いて、而かも割合に多く儲けるやうでなくちや當世風の世渡りじやあるめえと、さうだらう巡禮」

「その通り、お前さんは一番偉いよ」

「偉い筈だ、これでも元は男爵だつたのだぞ、澤山な家來も使つてたし、又數へ切れぬ程な財産もあつたのだ」

「それを何うしてしまつたのだね」

「費つてしまつた迄だ」

「オブレヌは譯もなく云つて、

「皆費つてしまつたのだ、その上に俺は自分の役目を悪い方へ使つて、政府の金まで費つた」

「政府の金まで？」

「さうだ、それで到頭男爵も取り上げられて終つたと云ふ譯だね」

「惜しいことをしたものだなア」

「惜しい。だが惜しくも無い。生れた時は俺だつて裸体だつたのだから」

「元へ返つたと云ふ譯だね」

「さうだ、たゞ元へ返つたのだ、ナニ惜しいもんか、夢だ。夢に金を拾つて目をさました時、それが夢だつたと氣着いても誰も惜しいことをしたとは思や

しない。思ふ者があつたら其奴は馬鹿だ」

「さ、それから長い間氣焰を吐いてゐたが、最後に、

「巡禮さんお前も、最うそろ／＼廻つて行くのだらう」

「さア、時候がよくなりましたでな、近いうちに立たうと思つてゐるのさ」

「旅行免状を持つてるかい」

「持つてるが、それは最う古い奴で間に合ひませんじや」

「そいつは、一寸困るだらう……しかし介ふこたア無い、俺だつて旅行免状なしに方々歩き廻つてるのさ。まア心配いらぬから早く廻つて行くさ」と、元氣よく二三時間も話してゐるうちに、疲さ酔の爲めに、いつさばなく長椅子の上に横たふれになる。

それから間もなくブラナアとサチンが何か云ひ争ひ乍ら歸つたが、二人の争ひは部屋に這入つても止まぬ。

「理屈ばかり吐しても、お前は無職じゃないか。理屈がパンの代用になるかい」と、アラナアは口を尖らす。サチンは笑ひ乍ら、
「だから気が利いてるさ云んだ、貴様のやうに朝から晩まで働いたところ、一日に二留も儲かるもんか、だから働く奴は俺に云はすれば馬鹿だ。貴様もやつぱり其の仲間だ」

「働く者が馬鹿なら、無職な貴様なんか罪人だ」

「罪人でもまだ、他人の奴隷になつて、犬のやうにパンの爲めなら腹這になる貴様と較べたら、俺はやつぱり偉い」

「食はんと居つても偉いと思ふのか」

「俺がいつ食んと居たか、俺なんかは、働かなくも斯うして、ちやんと神さまから食祿があるのだ、なに俺だけじゃない、空飛ぶ鳥でも、水に住む魚でも、奴等は何者だつて働かやしない。それでも飢へて死ぬ者が有るかい、貴様なん

か鳥にも劣つた人間だぞ、いや人間の屑だ」

「何で俺が人間の屑か」

「俺に喰つて貰はず自分で考へて見る、さうして貴様は毎日働いてゐやがつてさ、それでも時によるさ、食ふことが出来ねえで、ヒヨロ／＼してゐる日が澤山あるじゃないか、鳥が飢しい爲めに、飛ぶことが出来ないで地に落ちたのを貴様見たことがあるか」

「理屈ばかり吐しやがる」と、アラナアは言葉に詰ると、忌々しさに眩やき乍ら自分のベットの方に行く。

それと入違ひにクレシチが歸つて来て、

「ヤア、サチン奴、早くかへつてやがるな」と、いきなり吐鳴る。

サチンは、アラナアに逃げられて、相手を待つてゐる時であつたから、早速クレシチを捕へ、

「貴様呑んでるな」

「呑んでるさ、呑むのは俺の自由で、又唯一の樂だ」

「又、宿料まで呑んでしまったのだらう」

「よしんば、呑んでしまったところで、お前の要らぬお世話じやないか」

「ごつこい、左うは云はされえぞ」

「何が……何うだぞ？」

「貴様能く氣をつけて物を吐せ、貴様は最う俺に借のあることを忘れたのか」

「お前に借がある？そりや一体何日のこつた」

「これだから始末しまつにおへやしない」

と、サチンは椅子を押し出して、

「貴様の嫌が死んだ時だ、葬こむらの費用が足りねえからつて、俺に泣きついた覺があるだらう」

「ウム彼かい。いや之は俺が悪かつた」

「悪いさ氣が着いたら、返したら何だい」

「返すよ。屹度返す。だが今は返すことは出来ねえんだから……」

「いつに成つても左うだ。貴様のやうに、商買道具を質に置いて迄呑むやうな奴が、いつ他人に借りた金を返す時があるものか。貴様もやつぱり烏にも劣おとつた人足だ」

「やア、何さ云はれても仕方ない。なるべくならば、俺の借に棒を引いさいてから云つて貰ふさ、猶のこさ良いのだがへ、へ、へ、」

「勝手な熱ばかり吐きやがる！」

と、サチンが大聲を出して怒鳴ると、カーテンの奥から、

「八釜やかましいやい。何奴だガア〜怒鳴つさるのは？」と、ベルの聲がして、やがて出て來た、

「お前だなサチン、多分さうだらうと思つてた」

「そしたら出て来なくつても善いじゃないか」

「何だぞ？」とベベルはサチンの傍に進み寄つて、

「擲るぞ」

「擲る？こいつは面白い、遣るなら遣れ」

「諾ッ！」と、ベベルが拳骨を振り上げたところへ、役者が駈け込んで、

「ベベル、喧嘩だく」とベベルの袖を引いた。

ベベルは、それでも手を振り上げたまま、

「何處に喧嘩があるのだ」

「臺所だ、又いつもの姉妹喧嘩だが、今日は少しヤイキが強さうだ、ナターシ

ヤが捻ぢ伏せられてらア」

「なに、ナターシヤが？」

と、これを聞くさ、ベベルは飛ぶやうに駈け出して行く。

【その十四】

イサリーシ姉妹の喧嘩を聞いても驚ろく者はベベルだけで、餘の者は覗きに行かうともせぬ。

サチンは、役者を捕まへて下らぬ理屈を並べ立てるし、ブラナアはベットのの上に横になつて鼻唄をうたつてゐる。

又、オプレスは、これ等の騒がしい中で、平然と寝てゐるし、クレシチは、途中で拾つて来たらしい葉捲の吹さしに火を點けて、甘さうに吹かし乍ら、折々何か思ひ出したやうに、ニタ／＼笑つてゐる。

ベベルはいつ迄経つても歸つて来ぬが、カシニヤは麵麩の籠をかたげて入つて来た。

そして、長椅子の上に高駟を立て、寝てゐるオプレスを揺り起し、

「この人はまア、何さ云ふ野良呆だらう、ほんさうに呆れて物が云へやしないこれオプレスさん！」

「何だ、八釜しい」さ、オプレスはトロンコな目を開き、

「何か用か」

「何か用かも能く出来てるねお、前さんは真正に何うしたさいふの法子」

「どうもしやしない、能い氣持で寝たのだ。それをお前が揺り起したのじやないか、お前こそ何うしたのだ」

「ほんさうに呆れてしまふ」さ、カシニヤは忌々しさうに舌うちし、

「お前さんと妾とは共同で商買をしてるのじやないか、そしたら朝も一しよに出で、働くのも一しよに働いて、歸るのも一しよで無きや成らんだらう。それにお前さんは、途中でスツポ抜けて、其上酒まで食つて寝るさはこりや何

事だれ」

「俺は呑みたいから呑んだし、寝たいから寝た迄のことだ、お前がガミク云ふにや當らない」

「何さいふ氣樂蜻蛉だらう……じや商買の方は何うでも善いてえんだれ」

「そんな事云つてやしない、商買だつて俺は一人前に勉強してる」

「何が一人前なものか。お前さんと共同するのは最う止めだ」

「止めなら勝手に止めるさ、俺はそれどころじや無い。最うちつと寝な成らん彼方へ行つて呉れ」

さ、オプレスは、又ごろさなる、カシニヤは獨り腹を立て、怒鳴つてゐるが、相手が眉も動かさぬので、眩き乍ら臺所の方へ行つたが、やがて血相變へて引き返し、

「大變だく……人殺しだ」

これで、一同は云ひ合せた様に口を閉ぢカシニヤの方を見たが、

「何處が人殺しだ」と、役者が一番と問ふた、けれどもカシニヤは臺所の方を指すだけで物を云ふことさへ出来ぬ風である。

アラナアが役者を振り返つて、

「何處だつて介わんじやないか。澤山な人だから少々殺されるのも善からう」といへば、サチンも又、

「さうだく、働く者には一人でも人が減つた方がよいのだ、人が多いと働いても賃金が安いから、人殺が有る方が、お前たちの利益だ」といふ。

クレシチ迄が、廻らぬ舌で、

「病氣でくたばるのも、切られて死ぬのも壽命だ、死ねく」と

「皆、死んだらよい」

「なるべく金持の奴が死んで、其の金が我々の方へ廻つて来れば猶よい」

「殺される者には用はないさ」と、口々に冷淡なことを云つてゐるが、それに引代へ臺所では容易ならぬ騒動が始まつてゐる。

まづナターシヤは、全身血に塗れ這ひ乍ら唸つてゐるし、主人のミハイルは、之も血に染つたまゝ、既に息が切れてゐる。

四邊は一面血の海となり、生臭い空氣に充ちて居る空内で、ベベルが洋刀を逆手に持ち、イサリーシの胸倉を捕まへて、

「さア、今度は貴様の番だ」と叫んだ。

イサリーシは別に逃げも拂ひもせず、

「さア殺すなら殺して御覽」

「おゝ、殺すとも、今すぐミハイルのやうに、一突きで息の根を止めてやる」

「妾はお前さんに殺されりや本望よ、だがベベルさん。お前さんは何だつて罪のない妾を殺さうてえんだね、それだけ聞かせてお呉れね」

「何だこの阿女あま！」

さ、ベベルは吠ほへるやうに叫び、

「お前は、自分で罪がないと吐すのか」

「さうよ。又全く妾は何にも罪がないんだもの」

「舌長いことを吐せ。現在俺の婢のナターシヤを殺したのは貴様じゃないか」

「それで妾を殺すのならお止しよ、妾はナターシヤを殺したのじゃないのだから、ナターシヤを殺したのは、今お前さんが手にかけて、ミハイルだよ、妾は

全くナターシヤを殺しやしないよ」

「馬鹿云へ、己れ何と吐しても……」

「まア、お待ちてば、妾はいつでもお前さんに命いのちを上げるから、お待つてば、

……ねベベルさん」

「八釜やかましいやい。今の際きわになつて何を……」さ、ベベルが既に洋刀を揮はふさ

この騒ぎは暫くしてから、部屋の方へ知れたが、それを聞いても一同はさほど

驚ろいた風もなく、

「いづれ此こんな處ところになると思つた」とサチンが云ふと、プラナアは其の後につ

いて、

「ベベルに取つてはミハイルは邪じやまもの魔者だからなア」

「さうさ、イサリーシくつと姦通くつて居るのだから……しかし何うなるだらうベベル

は？」

「まア、シベリヤ行きさいふ所かな」

すると、オブレスはムク／＼と起き上り、

「なにシベリヤ迄は行かない、喧嘩の上の人殺だから罪は軽いよ」

「でも人殺しはシベリヤ行き相場が極つてらア」

「なに、俺は法律にはくわしいから云ふが、まア長くて三年だ、三年もすり

した時、どや／＼と這入つて來た巡查等は、いきなりべに躍りかゝつて其の凶器をもぎ取つた。そして、

「こら神妙にしる」と、折重なつて縛り上げたのである。

イサリーシは之を見るに、大聲を出して、

「お役人よく捕まへて下さいました。この野郎さ、そこに瘡れてゐるナターシヤと力を合せて、妾の夫のミハイルを殺したのですよ」と告げるのであつた。

べベルは之を聞くに縛られ乍らイサリーシを白眼へ、

「コラ、嘘を吐せ」と怒鳴り、巡查に向つて、

「主人のミハイルを殺したのは私でさア、これは少しも包むことなく云つても

善い。だが、このナターシヤに大怪我をさせたのは、其のイサリーシですよ」

「ウム、諾し、役所へ行つてから調べれば分ることだ、さア歩け」と、巡查は

べベルを引き立て、イサリーシをも連れて引き上げて行つた。

やべベルの野郎、又ノコ／＼と娑婆へ這ひ出して來らア」

「そんなものかね、じや俺も人殺をやるべい」と、クレシチが云ふ。オプレスは笑ひ乍ら、

「貴様のやうなお人善にも殺す程憎い仇があるのか」

「うんにや、さう云ふのじやない、金が欲しいからなア、それで金持でも遣つ

付けやうてえんだ」

「そいつは不可ない、それを遣つたらシベリヤ行きだぞ」

「さうか、では止すべえ」

「ハ、ハ、ハ」と、一同は頼れるやうに笑つた。

主人が殺されて、其の妻の妹が大怪我をし、仲間の一人が警察へ曳かれて行つて、彼等の仲間では、それに關する話は、たゞ此だけでおしまひだつた。

X X X X X X X

五日程するさいサリーシは警察から歸つて來た。

彼女は實際は、ナターシヤに大怪我をさせ、其の上ミハイルと、ベベルとを争はせて、ミハイルをも殺させたので有るが、うまく云ひ遁れをして無罪となつたのである。

ナターシヤの怪我は少々ではないが、それでも生命には別條ない。

貧民合宿所は以前の通り、静かになつた。そして一同は働いたり、呑んだり、争つたりして居るが、以前から較べて非常に物淋しくなつた。それはナターシヤが病院へ送られて居ないからではなく、旅役者のスウエルチユフが、いづこにも無く立ち去つたこと、ロカの姿が急に見へなくなつた爲めである。けれど、一同は役者の噂はしたことはない、折々はベベルのことを云ふ時もあるが、彼等の話頭になるものは、彼の巡禮のロカであつた。

善人が悪人かさへ解らぬロカは、何處に行つたので有らうか。それを知る者は

呪
の
聲
(終)

彼の肩にかけてゐる囊と、腰に下げてゐる土瓶と、そして杖とだけである。合宿所の庭には夏草が茂つて、赤煉瓦の塀には鳶が絡み上つた。

大正三年十月二十日印刷
大正三年十月廿五日發行

□定價金拾錢□
郵税金貳錢□

傑作叢書 (10) 祝の聲

著者 秋香小史

發行者 田村九兵衛

印刷者 南谷新三郎

發賣所

大阪市東區南久太郎町
心齋橋筋北へ入ル

田村熙春堂

振替口座大阪一三三五

賣捌所

全國各書籍店

傑作叢書 次目

■每冊實價十錢

■郵稅二錢■

- 第一編
- 第二編
- 第三編
- 第四編
- 第五編
- 第六編
- 第七編

トルストイ作
尙武會編
紀之海音作
近松門左衛門作
モサロツク作
ドローテ作
メーテルリンク作
イブセン作

フエジヤ(生?死?)
獨佛戰爭記(上)
心中物競
ミラダ
サランダ
青イ
イレエネ(一名戀ならぬ戀)

▲本叢書ハ毎月數冊刊行▼
▲本叢書ハ内外文學ノ生粹ナリ▼

第八編	名作珍本滑稽淨瑠璃
第九編	ストリンドベルヒ作 犠
第十編	ゴルキー作 夜
第十一編	チエホフ作 犬
第十二編	トルストイ作 戦
第十三編	ゾラ作 女
第十四編	ニトチエ作 哲
第十五編	シユミットボン作 街
第十六編	ハウプトマン作 寂
第十七編	ロスダン作 シヤントクレエル
第十八編	尙武會編 獨佛戰争記
第十九編	イブセン作 人民の敵
第二十編	ビヨルソン作 人以上

（以後續々逐次刊行）

終